

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

実験性の生態学——人新世における多種共生関係に関する比較研究

Ecologies of Experimentality: A Comparative Approach to Multispecies Coexistence in the Anthropocene

2. 研究代表者氏名

モハーチ ゲルゲイ

Gergely Mohacsi

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(2年目)

4. 研究目的

近年、新薬の臨床試験や遺伝子組み換え作物の試験栽培が例示するように、科学実験の現場は実験室から社会へと浸透していく傾向が顕著に見られる。この展開の背景には、科学技術への市民参加の拡大や、多種多様なデータ処理技術の急激な進歩など、社会的かつ科学技術的な要因が挙げられる。このような従来の科学実験が閉鎖された空間と時間から、社会全体へと拡大していくという展開を、「実験性」(experimentality)と呼ぶことができる。本研究では、この「実験性」において人間と動植物との相互作用がどのように再秩序化されるのかを、国内外の人文・社会科学で近年関心が高まる「人新世」

(Anthropocene)と日本で展開している「環世界」および共生研究との対話を通して比較検討する。科学技術への期待やイノベーションの状況が共生そのものの存在論的な基盤となることを人文科学の視点から分析研究するために、本研究では目的を二つ設定する。一つ目の目的は、人間と他の生き物との共生関係をめぐる変遷を描き出す事例の比較研究を重ね、「実験性」における共生関係の政治的、科学的、情動的な結び付きを明らかにすることである。二つ目の目的は、人新世の人文科学における水平的な方法論の展開を受け止めて、実験的な多様性の可能性を提示することである。

From randomized controlled clinical trials of pharmaceutical products to the field testing of genetically modified organisms or smart city experiments, in the past half century the site of scientific testing has expanded from the laboratory to society at large with all its political and ethical implications. These changes have been prompted by the increasing level of lay expertise and public participation in technological innovation, as well as by the rapid progress of data processing and computational infrastructures. We call the wide-

ranging consequences of this transformation “experimentality.” How has this public participation in experimentation reshaped the relationship between humans and other living things? In what sense can techno-scientific innovation be thought of as the ontological ground for multispecies togetherness in the Anthropocene? To answer these and other intellectually pressing questions, this project will engage in a comparative discussion with specialists in the environmental humanities in and outside Japan by building on existing theoretical frameworks such as *kansekai* (Umwelt) and *kyōsei* (togetherness). The aim of the project is twofold. First, it explores the political, scientific and affective re-construction of ‘multispecies togetherness’ in the Anthropocene through specific case studies and comparative analysis. Second, it provides a methodological ground to engage with the lateral move in the humanities by creating an experimental space for the ethnographic study of multispecies coexistence.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は、初年の最後の研究会でまとめた6つの研究焦点の整理を行い、人文学の方法と現場をつなぐという水平思考の基盤を固めた。モハーチ（班長）は「metabolic togetherness」、石井（副班長）は「umwelt and biodiversity conservation」、森田は「transition design」、瀬戸口は「laboratory and fieldwork」、鈴木は「experiments in decomposition」、中空は「experiments in decolonial politics」、石川は「ethnographic experiments」という課題を中心に人新世における実験性の個別研究を進めてきた。モハーチは”Toxic Remedies: On the cultivation of medicinal plants and urban ecologies”（刊行）”Healing together: The coexistence of humans and plants in the Anthropocene”（作成中）などの学術論文において、日本語の「共生」の概念を用いることにより、国際的に注目されつつある人新世研究の蓄積に新たな視点を加えることを試みた。年度末のリポート形式の共同研究会において、6つの焦点を3つに絞るための議論を行い、来年度以降の仮の課題組として(1)「多種共生の実験」(2)「生活としての実験」(3)「人新世という実験」を設定した。

6. 本年度の研究実施内容

2022-03-01 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 多種共生の実験・生活としての実験・人新世という実験 コメンテーター モハーチ ゲルガイ 大阪大学 人間科学研究科

2022-03-01 実験性の生態学：人新世における多種共生関係に関する比較研究 Research Focus for Experimental Ecologies コメンテーター 班員全員

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

石井 美保、瀬戸口 明久、岡澤 康浩

学内

石川 登(東南アジア地域研究研究所)

学外

モハーチ ゲルゲイ(大阪大学 人間科学研究科・准教授)、鈴木 和歌奈(総合研究大学院大学)、森田 敦郎(大阪大学 人間科学研究科)、中空 萌(広島大学 人間社会科学研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	2	4	1			0	9	1			0
		(1)					(1)				
国立大学	3	3	1			0	7	1			0
		(2)					(2)				
公立大学											
私立大学											
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	1	1	0			0	1	0			0
民間機関											
外国機関											
その他 ※											
計	6	8	2	0	0	0	17	2	0	0	0
		(3)	(0)	(0)	(0)	(0)	(3)	(0)	(0)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	4		1	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	13		2	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0			

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
争う(シリーズ人間科学7)	1	R4.3	感染症という闘いと共生	モハーチ ゲルゲイ
人類史・文明史からのレジリエンス	1	R4.3	プラネタリーヘルスと食の変革一人と地球の健康から「バックループ」の実験へ	モハーチ ゲルゲイ 木村友美
人類史・文明史からのレジリエンス	1	R4.3	Key Concept 3 生態学的レジリエンス	阿部健 モハーチ ゲルゲイ
サバンナの彼方―栗本英世教授退職記念文集	1	R4.3	雨の前後―民族誌の中から探る比較	モハーチ ゲルゲイ
未来共創	1	R3.3	医療とレジリエンス―新興感染症からの試論	小笠原理恵 モハーチ ゲルゲイ

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
官能の人類学:感覚論的転回を超えて	1	R4. 3	ゾーエーの海に身を浸す:妖術者と女性司祭のセクシュアリティと官能性	石井美保
官能の人類学:感覚論的転回を超えて	1	R4. 3	序章	石井美保
文化人類学	1	R3. 9	「止まった時間」を生きる:学校事故をめぐる倫理的応答の軌跡	石井美保
地域開発	1	R3. 8	「分人」を基盤とした世界とは—インドのスラムとガンジス川から所有主体を問いなおす	中空萌
日本工業所有権法学会年報	1	R3. 8	伝統的知識と知的財産権:文化人類学の視点から	中空萌
文化人類学	1	R3. 6	「法の生成」の人類学に向けて	高野さやか 中空萌
知財のフロンティア——知財法の学際的研究の現在と未来 第1巻	1	R3. 10	知的財産をめぐる人々の意識の醸成:現代人類学の視点から	中空萌
食物の生産・流通・消費	1	R3. 4	食の世界を生きる:食の人類学への招待	石川登
食う、食われる、食いあう—マルチスピーシーズ民族誌の思考	1	R3. 11	ウルシと共に生きる	鈴木和歌奈

本年度発表された高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文

雑誌名	インパクトファクター (数値)	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
East Asian Science, Technology and Society	1.163	1	R3.7	Toxic Remedies: On the cultivation of medicinal plants and urban ecologies	Mohacsi Gergely
Current Anthropology	2.983	1	R3.10	The Code of Pangolins: Interspecies Ethics in the Face of SARS-CoV-2	Ishii Miho
Social Studies of Science	4.038	1	R3.4	Improvising care: Managing experimental animals at a Japanese laboratory	Suzuki Wakana

本年度 共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
争う (シリーズ人間科学7)	栗本英世・モハーチ ゲルゲイ・山田一憲	R4.3	大阪大学出版会
官能の人類学: 感覚論的転回を超えて	石井美保・岩谷彩子・金谷美和・河西瑛里子	R4.3	ナカニシヤ出版

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

12. 次年度の研究実施計画

本共同研究の最終年度となる来年度は、初年度から引き続くコロナ禍の中で進められなかった国際連携に力を入れる予定である。トロント大学 (モハーチ) とアムステルダム大学 (鈴木) をはじめ、海外研究者との連携に取り組む。この連携を通じて、昨年度に引き続き、日本語の「共生」や「環世界」などの概念を用いることにより、国際的に注目され

つつある人新世研究の蓄積に新たな視点を導入したい。また各班員は、昨年度に個別研究で固めた水平思考を踏まえながら、「実験性」の概念をそれぞれのフィールドにおける対話やワークショップを通じて科学者、環境保護運動家などに紹介し、実践者固有の概念と比較し新たな概念を生成するなど、共同作業を試みるが見込まれている。具体的な共同研究活動においては、班員や国内外のゲストによる研究発表という形で6回程度の研究会および年度末に1回程度の国際シンポジウムを予定している。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	4	4	150,000
	一般旅費	1	1	50,000
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費	2	2	350,000
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				50,000
消耗品等経費				
その他	RA雇用、ホームページ維持費			150,000
合計				750,000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

共通の方法論の構築に向けて、実験社会を特徴付ける共生関係の再編に関する人文科学的な理解を深め、地域や科学技術などの特定の文脈の多様性を生かした「実験性」の概念の精緻化を試みる。初年度からホームページを作成し、共同研究のために活用してきたが、次年度からはホームページの公開により広く社会に研究成果を発信する。年度末に人文科学研究所で国際シンポジウムを開催し、「実験性」に関して先駆的議論を展開している研究者2名を招聘する予定である。招聘者を含めて各自が研究成果を論文にまとめ、国際論文集または国際学術誌の特集号として出版することを検討する。